

ふるさとの文化財探訪

小藩分立の影響を受けた県民性と郷土

文化財調査員 佐藤 頼久

大分の地名の由来は、北九州六ヶ国（豊前、豊後、筑前、筑後、肥前、肥後）を支配する大名の大友宗麟の「大」と彼の息子（義統）の無能ゆえに秀吉により改易され、

領地配分の草刈り場となった、小藩分立の「分」から大分となったと歴史的に考察するとしつくりくる。

まず、秀吉の家臣に与えられ、関ヶ原の戦いの時、黒田如水や加藤清正に荒らされ、関ヶ原後には家康の家臣達に恩賞地として細かく分封されてしまった。

このように大分の歴史は、宗麟時代の大きな国と江戸時代の十四もの小藩分立という小さく分けられるものとなった。

そこで県民性として小さく狭い所で約三百年間暮らしてきたので、心も狭くなり、重箱の隅をつつくような小賢い性格となり、赤猫根性という他人の足を引っ張ったり、出る杭は打つの偏屈なものとなった。

それで大分県民は県内では大成できないが、県外へ出ると解放されたように伸び伸びと大活躍できる人が現われる。それ故に大分県では教育に力を入れたのか教育者として広瀬淡窓（咸宜園）や帆足万里という有名人が輩出され、大思想家として三浦梅園が国東半島安岐に産まれた。中津藩出身の福沢諭吉は、明治を

リードする大立者として「学問のすゝめ」を著わし、慶応義塾を創立するなど一万円札の顔となった。

わが玖珠郡も森藩（殿様は久留嶋氏）と天領に分けられ、天領側の方が幕府の直轄地として優位に立ち、他を見下していたような感じだった。そういう歴史ゆえなのか!? 近年の町村合併問題が生じた時も、すんなりと合併という風にはゆかなかった。

享保四（一七一九）年八月には、平家山（野上村）と森藩領の日出生村の山境論争が起こった。俗に言う「平家百猿伝説」であり、猿八十七匹を射殺したという表現は、日出生村の訴えを退け、野上村の主張が八割方以上認められたという間接的な勝利宣言だとみとめることができます。（広報ここのえ二〇一六年六月号参照）



幸せになろうね



No.299

オリンピックと女性

1896年の近代オリンピック第1回アテネ大会では、女性の参加は認められていませんでした。女性の参加は第2回のパリ大会から認められたそうです。それでも大会出場選手997名のうち、女性は約2%のわずか22名でした。

日本人選手が初めて参加したのは、第5回ストックホルム大会です。しかし、日本人女性選手が参加するのは第9回アムステルダム大会で男性42名に対して女性は人見絹枝選手1名のみでした。

当時の日本ではまだ女性への偏見が強くあり、オリンピック出場を決めていた人見選手の家にも「人前で太ももをさらすなど日本女性にはあってはならない」、「日本女性の個性を破壊する」などといった文面の書簡が送られて来たと言われています。

人見さんは女子陸上競技に関する新聞記事に「いくらでも罵れ！私はそれを甘んじて受ける。しかし私の後から生まれてくる若い女子選手や、日本女子競技会には指一つ触れさせない」と書いています。

偏見に立ち向かい、人見選手は「愚かなりとも、努力を続ける者が最後の勝利者になる。」の発言通りひたすら努力を続け、オリンピックで日本人女性初のメダリストという栄光を手に入れました。

そのような方々のおかげもありオリンピック参加女性選手も徐々に増え、第31回リオデジャネイロ大会では日本人大会出場選手338名のうち、女性は164名もの人が出場しました。コロナ禍で大変な中での東京オリンピックでも多くの選手にベストコンディションで大会に臨んでもらい、よい記録が残せる大会となってほしいと願います。

社会教育課